九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子どもの前言語的コミュニケーションと母親の関わり行動の関連 : 応答的関わり・始発的関わりの観点から

毛利, 眞紀
九州大学大学院人間環境学府

大野, 博之
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/876

出版情報：九州大学心理学研究. 3, pp.145-155, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2002, Vol.3, 145-155

子どもの前言語的コミュニケーションと母親の関わり行動の関連

－応答的関わり・始発的関わりの観点から－

毛利　眞紀　九州大学大学院人間環境学府
大野　博之　九州大学大学院人間環境学研究院

The Correlational Study of Children's Proto-communicative Acts and Maternal Contingent/Responsive and Initiative Behaviors

Maki Mohri *(Graduate school of Human-Enviroment Studies, Kyushu University)*
Hiroyuki Ohno *(Faculty of Human-Enviroment Studies, Kyushu University)*

This study examined the relation between children's spontaneous proto-communicative acts and their mother's behaviors. 30 mothers and their 17-20 months participated in this study. A variety of maternal behaviors were observed in mother-child play interactions at home, and categorized from the view point of mother's gaze directions, and contingent/responsive behaviors and initiative behaviors to their children. Children's proto-communicative acts were observed in three kinds of toy presentation situations, and classified into proto-declarative acts, proto-imperative acts, and information-seeking acts. The correlation coefficients of these three variables with maternal gaze directions and behaviors were calculated. As a result, children's proto-declarative acts were significantly correlated with maternal gaze direction to their children's faces and behaviors. And then, correlations of children's proto-declarative acts with maternal contingent/responsive and initiative behaviors were significant ($r = .44$, $p < .05$; $r = -.36$, $p < .05$). In addition, the correlation coefficients of children's proto-declarative pointing, showing, utterance, and looking with maternal behaviors, gaze directions were calculated. Mother's contingent/responsive behaviors and gazes to the same objects as their children's gaze were significantly correlated to children's proto-declarative utterances and lookings. These results suggest that maternal attentive lookings and contingent responses to children's behaviors facilitate children's proto-declarative acts, especially proto-declarative utterances and lookings.

Keywords: mother-child interaction, proto-communicative acts, maternal contingent/responsive and initiative behavior

問　題

1歳を迎える頃になると，子どもの対人的コミュニケーションの在り方には大きな変化が現れる。それ以前は，乳児対母親，乳児対モノといった2者間に閉ざされたコミュニケーションであったのが，1歳を迎える頃になると，モノや他の人を介した3項間でのやりとりが展開されるようになる（Trevarthen, 1979 ; Bakeman & Adamson, 1984）。

この3項的相互交渉において子どもは，自分が関心を持ったものを指して知らせる指差し（pointing），手に持って見せる呈示（showing），手渡し（giving），振り向いて相手の様子を伺う参照視（referencial looking），それらに伴う発声といった前言語的なコミュニケーション行動を用いはじめる。これらの行動は，外界の対象や自分に対して働きかけを行う行為者としての他者を，乳児が理解し始めたことを示すものと考えられており（Tomasello, 1995 ; Moore & Corkum, 1994），これらの社会認知的スキルを通して，他者から直接学ぶのみでなく，他者を介して自ら様々な理解を広げることができるようになると論じられている（Tomasello, 1995）。この3項的な前言語的コミュニケーションは社会的発達の基盤となるものとして，後の言語・認知発達（Olson, Bates,. & Bayles, 1984 ; Tomasello, 1986 ; Desrochers, Ricard, Decarie, Allard, 1994 ; Saxon, 1997），対人理解や“心の理論”発達（Wellman, 1993, Tomasello, 1994）との関連から重要性が議論されてきた。

子どもの前言語的コミュニケーションの発達において，大人は大きな役割を果たしているものと考えられる。なぜなら，日々の生活の中で乳児の主な関わり手となるのは養育者であり，乳児と大人と対象物という3項的なやりとりにおいて，関わり手である大人の存在無くして，また関わりの在り方によっては，対象物に焦点化されたコミュニケーションは展開され得ないからである。これまでの研究において，分散しがちな乳児の注意を方向付け，対象への注意共有を持続するのに母親が有効に働いていることや（Lawson, Parinello, and Ruff, 1992 ; Findji, 1998），親の応答的な関わりが前言語的な伝達行

動の出現に貢献していることが示されている（Hoff-Ginsburg, 1987 ; Acredolo, L. & Goodwyn, S., 1988）。大人は子どもとの関わりの中で，注意の対象を共有し，対象に関したやり取りを維持・展開するための“足場”（Bruner, 1975）として機能しているのである。

母子の共同注意に関する研究では，親が子どもの注意に対し追従するか，もしくは子どもの注意を転換させる形で関わるかどうかが，やり取りの成立や後の言語発達に関連していることが明らかにされてきた。Tomasello & Farrar（1986），Tomasello（1992）は，共同注意エピソードにおける母親の関わり方と，子どもの後の語彙発達との関連を検討した。その際，母親の相互作用スタイルについて，attention following（子どもの注意への追従）とattention switching（子どもの注意の転換）の２つの視点で分類し関連をみている。その結果，相互作用において母親がattention following方略を多く用いていた場合に，後の子どもの語彙が多いこと，また言語発達が早いことが示された。Tomaselloら（1986，1992）は語彙発達との関連を検討するものであったが，矢藤（2000）は，20ヶ月齢児と母親のおもちゃ遊び場面における母親の働きかけについて応答，転換の２つの視点で分類し，それらに続く子どもの反応を検討している。その結果，母親の“転換”は子どもによって拒否または無視されやすいこと，また，やり取りの開始者が母親の場合より子どもの場合の方が，注意共有の持続時間が有意に長いことが示された。これらの結果は，相互交渉において母親が用いる“転換”は，子どもと注意を共有したやり取りを維持させるのに有効な方略ではないことを示唆するものと考えられる。

これまで，母親の“応答”“転換”という働きかけと，子どもの言語発達や反応の在り方との関係について検討されてきたが，このような母親の関わり方は子ども自身が持つコミュニケーション特性と，どのような関連を持つのであろうか。本研究では，母親が行う子どもの注意や行動に対する“応答的・随伴的”な関わり方や子どもの注意や行動を転換させる“始発的”な関わり方，並びに注意の方向性と，子どもの自発的な前言語的コミュニケーション行動の在り方との関連を検討する。

子どものコミュニケーション行動について，これまでは子どもの発する行動を質的に分けることなく，母親の関わり方との関連を見られてきたが，母親の関わりがどのような子どものコミュニケーションに関連するのかという視点での検討が必要と思われる。

Moore & Corkum（1994）は乳幼児期の社会的理解の論考において，前言語的コミュニケーション行動についてBates（1975，1976）の論をもとに原叙述的行動，原命令的行動，そして参照視を情報探索行動として，３つに分けて論じている。Bates（1975）によれば，原命令的行動は自らの要求を実現するために他者を用いる行動であり，原叙述的行動とは“自身の関心の対象に大人の注意を向けさせるための前言語的努力”である。Mooreら（1994）は，母親が対象を見ているという他者の視点を理解しているかどうかは疑問としながらも，原叙述的行動について，大人が興味深い反応を自分に向けてくれる存在であると乳児が理解していることを示すと考え，対象に向かってというよりむしろ，自分に対する何らかの働きかけを期待して行う行動であると述べている。また，１歳前後の原叙述的な指差しの使用は初期の語彙量と関連することが明らかにされている（Folven, Bonvillian & Orlansky, 1985）。子どもはこの原叙述的なコミュニケーションを発することによって他者と共有的なやり取りを持つことができ，共有的やりとりを繰り返す中で，対象を介在させる他者との関係性や外界の物事に対する理解，そして言葉を広げていくのかも知れない。情報探索行動は，いわゆる社会的参照であり，ある対象や出来事に面した時に，他者の表出を伺い見て情報を求めることである（Klinnert, Campos, Sorce, Emde, Svejda, 1983）。他者の情動表出や行為から対象に関する理解を得る社会認知的プロセスとして扱われてきた。Baldwin & Moses（1996）はこの行動について，自らの“能動的な”情報収集であり，より効率的な学習を可能にしていると述べている。

本研究では，これら３つの子どもの行動と，母親の応答・随伴的関わり，始発的関わり，注視方向の間の関連を検討する。また，３つの子どもの行動の中で用いられる，指差し，呈示，手渡し，発声，lookingと母親の関わりとの関連も見ることで，より詳細な考察を行う。子どもの３つの行動について単純に定義付けることは難しいが，本研究では原命令的行動を“自らの要求を実現するための援助要求行動”とし，原叙述的行動を“自身の関心の対象を母親に伝え，対象に関する共有的やり取りを求めるコミュニケーション行動”とし，操作的に分類を行う。また情報探索行動については“直接的な他者への働きかけは行わず，対象に向かう他者の様子を伺い見ること”とする。また，積極的に原叙述的コミュニケーションを発する子や少ない子，親をよく参照する子や参照をしない子といった子どもの持つ傾向をとらえる事を試み，母親の関わり方との関連を検討するため，子どもの３つのコミュニケーション行動は玩具呈示場面で自発的なものを観察することとした。そして，母親の関わりはできるだけ普段通りの関わり方の特徴を見るために，母子自由遊び場面で観察を行った。

方　法

対　象

F市に在住する母子30組。F市内の保健所で行われた1歳6ヶ月健診で，家庭での母子遊びの観察への協力を依頼した際，協力を受諾した母子である。

そのうち男児は19名，女児は11名，第1子が24名，第2子が4名，第3子が2名であった。子どもの月齢は，17ヶ月齢が3名，18ヶ月齢が10名，19ヶ月齢が16名，20ヶ月齢が1名であった。各母親にKIDS（乳幼児発達スケール；三宅和夫ら，1989）を記入してもらい，理解言語と表出言語の発達年齢を求めた。各月齢における発達年齢（月齢）の平均値と発語数についてTable 1に示す。母親の平均年齢は31歳，20歳代が11名，30代が19名，40代が1名であった。

各協力者には，協力依頼の時点で，本研究の主旨と手続きの説明を書面と口頭で行い，訪問時に再び，母親に対して手続きの説明をした上で観察へと移った。

手続き

母親の関わり行動の観察を母子自由遊び場面で，子どもの自発的な前言語的コミュニケーションの観察を玩具呈示場面で行った。各家庭には，観察者1名が訪問し，VTR撮影を行った。

(1) 母子自由遊び場面の観察

母子自由遊びの為に，観察者が積み木と，様々な乗り物の形をしたブロックを用意した。遊びに入る前に，母親に対し普段遊ぶように自由に遊んでほしいこと，積み木とブロックを用意しているが必ずしもその玩具で遊ばなければならない訳ではないことが伝えられた。母子自由遊び場面は，約15分間観察され，VTRに収録された。

(2) 玩具呈示場面の観察

子どもの自発的な前言語的コミュニケーション行動を観察するために，3つの玩具呈示場面が設定された。

玩具呈示場面では，母親からの働きかけに応えるのではない，自発的な子どものコミュニケーション行動を捉えることを目的とするため，母親の表出は一定に操作された。各玩具呈示場面に入る前に，母親に対し，呈示される物や状況の説明を行った。また，玩具呈示場面においては，基本的に子どもの様子を見守っていてもらうが，子どもの注意を引くような発声や行動をしないこと，大きく笑ったり，しかめっ面になる等，大きく表情を変化させないこと，子どもからの働きかけに対しては頷く，「うん。」「そうね。」という応答にとどめることをお願いした。

3つの場面と玩具については，予備観察によって選定された。玩具は予備観察において，子どもの関心を引きやすく，それを介した大人への働きかけがより多く見られた物と場面であった。3つの場面は以下のものである。

①円柱形の置物が呈示される場面
　高さ約20cm×直径7cmの円柱形の置物で，中を，水色の球形になった液体がらせん状に降りていく。呈示物は，子どもに声をかけずにそっと置かれ，子どもが自ら気付くまで放置された。

②電動式の機関車が走るレールボードが呈示される場面
　長さ約10cmの電池式の機関車をレールボード（縦35cm×横50cm）の上で走らせた状態で呈示。機関車はモーター音をたてながら走る。呈示の際は，子どもに対して声は一切かけられなかった。

③玩具をプラスチックケースに入れられる場面
　子どもが遊んでいた玩具を，観察者が透明のプラスチックケースに入れてしまう。プラスチックケースは，縦17cm×横23cm×高さ17cmの大きさで，子どもにとって持ち運び可能な大きさと重さではあるが，自力で蓋を開けることはできないものであった。観察者は「この玩具を，ここに入れてお片付けしよう。」と言い，子どもの遊んでいた玩具をケースに入れた。蓋を閉めた後，観察者はケースを置き，その場を離れた。

各呈示場面は，子どもが呈示物に気付いてから3分間観察された。

特に観察場面③において，子どもが激しく泣きだしたり，激しく苦痛を訴えた場合には，その時点で手続きを中止し，時間をおいて，玩具を替えてから再度行なった。各呈示場面の間は数10分の自由時間，休憩時間がおかれた。呈示場面①と呈示場面②の試行順は，被験者によってランダムに変えられ，呈示場面③は最後に行われた。各場面はVTRに収録された。

母親の関わり行動の評定

自由遊び場面における母親の関わり行動カテゴリーを作成するため，サンプルのうち10名分のVTRを観察した。まず，母親の行動を，子どもの注意，遊び，行動に対して応答・随伴的であるか，随伴せず始発的であるかという観点から2つに分類した。そして，“応答・随伴的関わり”“始発的関わり”それぞれについて母親に見られた行動を全て抽出し，それをもとに下位行動カテゴリーを作成した。また注視方向については，子どもの行動の

Table 1　理解言語・表出言語の発達年齢と発語状況

	人数	理解言語（月齢）	表出言語（月齢）	発語数（人数） 1~3個	発語数（人数） 5個以上	2語文（人数）
17ヶ月齢児	3	17.3	19.0	3	0	0
18ヶ月齢児	10	19.0	19.7	4	6	1
19ヶ月齢児	16	20.7	20.8	6	10	2
20ヶ月齢児	1	22.0	21.0	0	1	0

Table 2　母親の関わり行動の分類と定義

分類	行動の内容	
注視方向	子どもの顔の注視	：子どもと顔を見合わせる、はっきりと子どもの顔を見る
	子どもの行動の注視	：子どもの行動・様子を見る
	子どもと同じオモチャ・モノの注視	：子どもの遊ぶオモチャを見る、もしくは、子どもが母親の動きを見ている時の自分が持つオモチャの注視
	その他の場所・モノの注視	：その他の場所を見る
応答・随伴的関わり	子どもの直接的働きかけへの応答的発声・返事	：子どもの発声、行動による直接的な働きかけへの応答、返事
	応答的行動	：子どもの直接的な働きかけや要求に応える行動　受け取る等
	子どもの行動に対する声かけ・発声 音付け・調子付け	：「トントントン…」「ウンウンウン」等の擬音を付ける 積み木を積みながらの「ハイ」「よいしょ」等
	ラベリング・意味付け	：「車ね。」「お空飛んでるものだね。」「黄色」 「倒れた」等、名前、属性、出来事のラベリング
	遊びを促す言葉・励まし・賞賛	：「頑張れ」「もっともっと！」等遊びを促す言葉、 励まし、「すごいね」等の賞賛
	感嘆詞	：「あっ！」「あらららら…」「あーあ。」等の感嘆詞
	質問	：「それどうするの？」「それ何？」等、 子どものする事に対する質問
	説明	：「ここをくっつけるのよ」「こうすれば積めるよ」等、 子どもの遊びに関する説明
	子どもの気持ちに沿う言葉	：「びっくりしたね」「おもしろいね」「残念だったね」等、 子どもの気持ちに沿う言葉かけ
	子どもの行動に対する感想、母親の気持ちを語る言葉	：「○○君はそういうこともできたのね」 「ママがそれしようと思ったのに。」等の感想、気持ち
	子どもの行動に対する拍手・うなずき	：子どもの行動に対し、拍手をする、またはうなずく
	子どもの行動への動作的なフォロー　援助行動	：子どもからの直接的要求に応えるのではない、積み木を 取ってあげる、支える等、子どもの遊びを手助けする行動
	子どもの行動の真似・共同遊び	：子どもと同じ遊びに参加する。子どもの行動を真似る。
	共同遊びの中での自分の行動に伴う発声、音付け	：「トントントン」「モグモグモグ」等、自分の行動に合わせた発声
始発的関わり	子どもへの呼びかけ	：注意を引くように名前を呼ぶ等で声をかける 「○○ちゃん！」「ほらほら！」
	質問	：「これ何だ？」子どもの遊びに沿わない、 母親始発の質問、問いかけ
	要求・教示	：「～を取って」「～をちょうだい」「～して」 「～しなさい」といった要求、教示
	誘いかけ	：「～しようよ」「これおもしろいよ」等の誘いかけ
	新たなオモチャでの遊びの呈示行動	：子どもが遊ぶオモチャとは全く異なる 新たなモノでの遊びを呈示する行動
	発声　音付け・調子付け	：「トントン」「よいしょ、よいしょ」など
	ラベリング・意味付け	：「一つ二つ…」「赤、黄色、青…」など
	オモチャ・遊びの説明	：「四角い積み木を乗せていくよ」等の遊びの説明
	子どもの遊ぶオモチャを用いた新たな遊び方の呈示行動	：子どもが遊ぶオモチャでの遊びかたを転換させる行動呈示
	発声　音付け・調子付け	：「ころころころ…」「トントントン」など
	ラベリング・意味付け	：「一つ二つ…」「赤、黄色、青…」など
	オモチャ・遊びの説明	：「これとこれはつながるみたいよ」 「こうすればコマみたいに回るよ」等の遊びの説明
	自分の遊びに用いたオモチャを手渡す	：自分の遊びに用いるオモチャを手渡す
その他に見られた行動	子どもの行動を見てクスクス笑う	：子どもの行動を見ての、クスクス笑い
	ひとり遊び	：遊びに子どもを誘うわけでもなく、 子どもの遊びと異なるオモチャで遊ぶ、触れる
	ひとりごと	：子どもの遊びや子どもへ向けられていない発声、ひとりごと
	禁止・注意の声かけ	：子どもの行動に対し「だめよ。」「そんな事しないの。」等

どこに注意を向けているのかという観点から，“子どもの顔の注視”“子どもの行動の注視”“子どもと同じオモチャ・モノの注視”“その他の場所・モノの注視”の4方向に分けてチェックを行った。“子どもの顔の注視”は子どもの顔をはっきりと見ているもの，“子どもと同じオモチャ・モノの注視”は母親の視線が対象に向いていることが確認できるもの，“子どもの行動の注視”は子どもの関わる対象を含めて行動全体を見ているものとした。各カテゴリーの説明はTable 2に示す。

分析は，自由遊びが開始してから10分間の行動を対象とし，各下位項目について，5秒を観察単位とする1／0サンプリングを行った。各注視方向と関わり行動の数値化は，注視方向については各分類における5秒ごとにチェックされた回数を，関わり行動については各分類ごとに下位項目のチェックされた回数を加算し，応答・随伴的関わり，始発的関わりそれぞれの得点とした。

評定の信頼性を確認するため，サンプルのうち5名分のデータについて，本実験に関与していない心理学を専攻する大学院生1名と筆者で評定を行い，一致率を算出した。その結果，.78の一致率が得られたため，残りのサンプルについては筆者が評定を行った。

子どもの前言語的コミュニケーション行動の評定

子どもの前言語的コミュニケーションの評定は，3つの玩具呈示場面を通して見られた，対象物を介して人へ向かう子どもの伝達行動を対象として行なった。

行動の分類は，Bates（1975）Mooreら（1994）の論を参考に，原叙述的行動，原命令的行動，情報探索行動の3つに分類した。先にも述べた様にこれらの行動について単純に定義付けることは難しいが，本研究では，指差し，呈示，手渡し，それらに伴う発声や母親を見る（looking）といった行動について，行動の前後の文脈から判断し，援助要求として行われたものを原命令的行動とし，自身の関心の対象を母親に伝え，対象に関する共有的・叙述的やり取りを求めるために行われたものを原叙述的行動とした。そして伝達的行為を取らずに母親を見る行動を情報探索行動とし，操作的に分類することとした。また，いずれの行動とも判断しにくく，また伝達的と判断しにくかった行動はその他とした。各行動の内容についてTable 3に示す。

評定は，各玩具呈示場面3分間，計9分間の子どもの行動を対象とし，各下位行動について5秒ごとの1／0サンプリングを行なった。評定の信頼性を確認するため，本実験に関与しておらず，また母親の関わり行動評定にも関与していない，心理学を専攻する大学院生1名と筆者が，サンプルのうち10名分のデータを評定し，一致率を算出した。その結果.83の一致率が確認されたため，筆者が残り20名分ついて評定を行なった。各行動分類の数値化は，原叙述，原命令，情報探索それぞれについて，下位行動項目のチェックされた回数を加算し，得点とした。また，原叙述的行動，原命令的行動それぞれの中で用いられた指差し，呈示，手渡し，発声，lookingについても，カウントした。

Table 3　子どもの前言語的コミュニケーション行動の分類

原叙述的行動	指差し＋母親の注視＋発声	：母親の注視と発声を伴う指差し
	指差し＋母親の注視	：母親の注視のみを伴う指差し
	指差し＋発声	：発声のみを伴う指差し
	指差し	：注視も発声も伴わない指差し
	オモチャ・モノの呈示＋母親の注視＋発声	：母親の注視と発声を伴う、オモチャ・モノの呈示
	オモチャ・モノの呈示＋母親の注視	：母親の注視のみを伴う、オモチャ・モノの呈示
	オモチャ・モノの呈示＋発声	：発声のみを伴う、オモチャ・モノの呈示
	オモチャ・モノを持つ／触れる＋母親の注視＋発声	：オモチャ・モノを持つまたは触れつつ、母親を注視し、発声
	オモチャ・モノを手渡す	：オモチャ・モノを手渡す
	オモチャ・モノと母親を交互に見る＋発声	：母親とオモチャ・モノを交互に見ながら、発声する
原命令的行動	※不快な表情伴う、または、オモチャ・モノを開けようとする動作、走らせようとする動作に続く以下の行動。	
	指差し＋母親の注視＋発声	：母親の注視と発声を伴う指差し
	指差し＋母親の注視	：母親の注視のみを伴う指差し
	指差し＋発声	：発声のみを伴う指差し
	指差し	：注視も発声も伴わない指差し
	オモチャ・モノの呈示＋母親の注視＋発声	：母親の注視と発声を伴うオモチャ・モノの呈示
	オモチャ・モノの呈示＋母親の注視	：母親を注視を伴うオモチャ・モノの呈示（発声は無し）
	オモチャ・モノの呈示＋発声	：発声を伴うオモチャ・モノの呈示（母親の注視は無し）
	オモチャ・モノを持つ／触れる＋母親の注視＋発声	：オモチャ・モノを持つまたは触れつつ、母親を注視し、発声
	オモチャ・モノを手渡す	：オモチャ・モノを手渡す
	オモチャ・モノと母親を交互に見る＋発声	：母親とオモチャ・モノを交互に見ながら、発声
情報探索行動	オモチャ・モノを持つ＋母親を注視	：オモチャ・モノを持ち（母親に見せる行動をせず）母親を注視
	母親とオモチャ・モノを交互に注視	：オモチャ・モノに触れず、母親とオモチャ・モノを交互に見る
その他見られた行動	オモチャ・モノを叩く／投げる＋母親の注視	：オモチャ・モノを叩く、投げるという行動に続く、母親の注視
	母親の身体を押す／揺らす	：母親の身体を押したり、揺らしたりする
	母親にオモチャ・モノを押し付ける	：母親の身体にオモチャ・モノを押し付ける
	母親の手を引く	：母親の手を引いてオモチャ・モノの所へ連れて行く
	母親にしがみつく	：母親の身体にしがみつく

結 果

1．自由遊び場面における母親の注視方向と関わり方

母親の4つの注視方向と応答・随伴的関わり，始発的関わりの平均カウント数と標準偏差を算出した（Table 4）。これらの数値からは，母親の注視方向や関わりのあり方には，幅広い個人差が存在することが考えられる。

母親の注視方向ついて，“子どもの行動の注視”が平均103.1（SD12.67），“子どもと同じオモチャ・モノの注視”が平均97.7（SD17.87）とカウント数が多かった。これらのカウント数を10分間中の割合として換算すると，“子どもの行動の注視”が85.9%，“子どもの同じオモチャ・モノの注視”が81.4%であり，自由遊びにおいて母親達が多くの時間，子どもに注意を向けていることが分かる。

また，関わり方について，応答・随伴的関わりと始発的関わりのカウント数を，対応のあるt検定で比較した。その結果，応答・随伴的関わりが始発的関わりよりも有意に多かった（$t(29)=3.59, p<.01$）。この2つの関わり方の平均カウント数を，10分間中の割合に換算すると，応答・随伴的関わり74.2%，始発的関わり51.9%であった。母親達は自由遊び場面で，より多く，子どもの注意や遊びに合わせた関わりを行なっていることが示された。

注視方向と関わり方の関連を検討するため相関係数を求めたところ，応答・随伴的関わりと“子どもと同じオモチャ・モノの注視”（$r=.47, p<.01$），始発的関わりと“子どもの行動の注視”（$r=-.79, p<.001$）“その他の場所・モノの注視”（$r=.54, p<.01$）に有意な相関が認められた。この結果から，“子どもと同じオモチャ・モノの注視”を多く行う母親は応答・随伴的関わりを多く行っており，始発的関わりが多かった母親は，子どもから注意が外れて“その他の場所の注視”をしていることが多く，“子どもの行動の注視”が少なくなっていたことが分かる。

Table 4 母親の注視方向，関わりの平均カウント数と標準偏差

	平均（SD）	(range)
注視方向		
子どもの顔の注視	20.5 (11.58)	(5-47)
子どもの行動の注視	103.1 (12.67)	(64-119)
子どもと同じオモチャ・モノの注視	97.7 (17.87)	(46-115)
その他の場所・モノの注視	18.8 (11.11)	(5-55)
関わり方		
応答・随伴的関わり	89.3 (28.93)	(29-135)
始発的関わり	62.3 (34.80)	(21-153)

2．子どもの原叙述，原命令，情報探索行動と下位行動

子どもの原叙述・原命令・情報探索行動，及び原叙述的行動，原命令的行動の中で用いられていた指差し，呈示，手渡し，発声，lookingの平均値と標準偏差をTable 5に示す。子どもの各行動についても，それぞれrangeに開きがあり，各行動とも広い個人差があることが想定される。

子どもが発した原叙述的行動，原命令的行動，情報探索行動行動の多さに違いがあるのか検討するため，3つのカウント数について繰り返しのある一要因分散分析で比較したところ，行動による有意差が認められ（$F(2,58)=11.3, p<.01$），多重比較の結果（$p<.05$），原叙述的行動と原命令的行動が情報探索行動よりも多かった。原叙述的行動と原命令的行動の間には有意差は認められなかった。

また，原叙述的行動の中で用いられた“手渡し”について，この行動を示した子どもが30名中14名と少なく，また歪度2.5と分布の偏りが大きく，一般性を欠くデータであることが想定されたため，母親との相関分析からは除外した。

Table 5 子どもの前言語的コミュニケーション行動の平均カウント数と標準偏差

	平均（SD）	(range)
原叙述的行動	10.5 (5.3)	(2-26)
原命令的行動	8.4 (4.2)	(1-20)
情報探索行動	4.9 (3.5)	(0-14)
原叙述的		
指差し	4.1 (4.5)	(0-18)
呈示	2.5 (1.7)	(0-8)
手渡し	.9 (1.5)	(0-7)
発声	7.7 (5.8)	(0-23)
looking	8.0 (4.6)	(2-17)
原命令的		
指差し	1.0 (1.5)	(0-5)
呈示	3.1 (2.5)	(0-9)
手渡し	2.1 (1.8)	(0-6)
発声	5.4 (3.6)	(0-14)
looking	5.8 (3.6)	(0-13)

3．母親の注視方向，関わり方（応答，始発）と子どもの原叙述的行動，原命令的行動，情報探索行動の関連

母親の4つの注視方向，応答・随伴的関わり，始発的関わりと，子どもの原叙述，原命令，情報探索行動との関連を検討するため，相関係数を算出した（Table 6）。

その結果，母親の注視方向との関連としては，子どもの原叙述的行動と母親による“子どもの顔の注視”“子ど

もの行動の注視”の間に正の相関（順に，r=.43，p<05；r=.41，p<.05），また子どもの原叙述的行動と母親による”その他の場所・モノの注視”との間に負の相関が認められた（r=-.36，p<.05）。子どもの原命令的行動と母親の注視方向の間には相関は認められず，情報探索行動との間では，“子どもと同じオモチャ・モノの注視”に正の相関の傾向が認められたのみであった（r=.34，p<.10）。

また母親の関わり方との関連を見ると，子どもの原叙述的行動と母親の応答・随伴的関わりとの間に正の相関（r=.44，p<.05），始発的関わりとの間に負の相関が認められた（r=-.36，p<.05）。原命令的行動と母親の関わり方の間ではいずれも有意な相関は認められなかった。また，子どもの情報探索行動と母親の応答・随伴的関わりの間に正の相関の傾向が認められた（r=.34，p<.10）。

4．母親の注視方向，関わり方（応答，始発）と子どもの下位行動の関連

母親の4つの注視方向，応答・随伴的関わり，始発的関わりと，子どもの原叙述的行動，原命令的行動それぞれにおける下位行動（指差し，呈示，手渡し，発声，looking）の関連を検討するために，相関係数を求めた（Table 7）。

原叙述的行動の中で用いられた下位行動との間では，指差しと母親による“子どもの顔の注視”“子どもの行動の注視”の間に相関の傾向（順に，r=.33，p<.10；r=.35，p<.10）が示された。また，発声との間では“子どもの顔の注視”（r=.40，p<.05）“応答・随伴的関わり”（r=.58，p<.01）と正の相関，“同じオモチャ・モノの注視”（r=.34，p<.10）“その他の場所・モノの注視”（r=-.31，p<.10）と相関の傾向が認められ，lookingとの間では“同じオモチャ・モノの注視”（r=.50，p<.01）“応答・随伴的関わり”（r=.60，p<.01）と有意な相関，“その他の場所・モノの注視”（r=-.33，p<.10）と負の相関の傾向が認められた。

原命令的行動の中で用いられた下位行動と母親の注視及び関わり方の間には，有意な相関は認められなかった。ただし，呈示と母親の“始発的関わり”（r=.31，p<.10），手渡しと“同じオモチャ・モノの注視”（r=-.34，p<.10），発声と“子どもの顔の注視”“始発的関わり”（順に，r=.34，p<.10；r=.31，p<.10），lookingと“子どもの顔の注視”（r=.31，p<.10）の間で相関の傾向が認められた。

Table 6　母親の注視方向，応答的関わり，始発的関わりと子どもの原叙述・原命令・情報探索行動の相関

子ども ＼ 母親	注視方向				応答・随伴的関わり	始発的関わり
	子どもの顔	子どもの行動	同じモノ	その他の場所		
原叙述的行動	.43*	.41*	.30	-.36*	.44*	-.36*
原命令的行動	.29	-.10	.01	-.10	.02	.24
情報探索行動	-.20	.08	.34+	-.21	.34+	.01

* p<.05　+ p<.10

Table 7　母親の注視方向，応答的，始発的関わりと子どもの下位行動の相関

子ども ＼ 母親	注視方向				応答・随伴的関わり	始発的関わり
	子どもの顔	子どもの行動	同じモノ	その他の場所		
原叙述的						
指差し	.33+	.35+	.16	-.22	.13	-.26
呈示	.15	.04	.11	-.09	.09	.02
発声	.40*	.29	.34+	-.31+	.58**	-.21
looking	.23	.25	.50**	-.33+	.60**	-.27
原命令的						
指差し	.28	.10	.23	-.13	.17	-.04
呈示	.13	-.21	-.04	.11	-.01	.31+
手渡し	.06	.09	-.34+	-.09	-.16	.02
発声	.34+	-.26	.10	.03	.08	.31+
looking	.31+	-.14	.18	-.10	.13	.24

** p<.01　* p<.05　+ p<.10

考 察

自由遊びにおける母親の注視方向と関わりについて

まず自由遊び場面における母親の注視方向について，母親はかなり多くの時間，子どもに又は子どもの注意の対象に視線を向けていた。また，母親の関わり方について，子どもの注意や遊びを転換させる始発的な関わりよりも，子どもの注意や遊びに従って働きかける応答・随伴的関わりを母親達が多く行っていることが示された。この結果は矢藤（2000）の所見と一致するものである。これらの所見は，子どもとの遊びの中で，母親達が子どもの関心の対象や行動にしっかり注意を向け，子どもの注意や関心に沿った関わりをかなり高い割合で行なっていることを表すものと考えられる。

また，注視方向と応答・随伴的関わり，始発的関わりの相関検定の結果，応答・随伴的関わりを多く行なっている母親は子どもと同じ対象に注意を向けていることが多いこと，そして始発的関わりが多い母親は，子どもの様子や注意の対象から視線が逸れていることが多いことが示された。子どもの関心の対象や遊び方をよく見ていることで，子どもの関心に合わせた関わりをより多く行なえるのだろう。また，子どもの関心とは関係無く母親側からの提案等を含む始発的な関わりを多く行なう母親は，自身が提案しようとするものに関心が向いてしまう為，結果として子どもから視線が逸れているのかもしれないし，反対に子どもの様子を見ていないことが多いことから，子どもの注意とは異なる始発的な働きかけが多くなっているのかもしれない。

玩具呈示場面における子どもの原叙述・原命令・情報探索行動について

玩具呈示場面で子どもが行なった，原叙述的行動と原命令的行動のカウント数には有意な違いが無く，情報探索行動は先の2つの行動より有意に少ないことが確認された。

統計的な有意差は無かったが，全体的としては，原命令的行動よりも原叙述的行動の方が若干多く行なわれていた。統計的な検定は行なっていないが，下位行動から内容を比べると，“指差し”は原命令的行動よりも原叙述行動の中で用いられることが多かった。反対に，“手渡し”は原命令的行動の方が多く，原叙述的行動の中で用いた子どもは少なかった。原叙述的行動がBates（1976）によって“共有的やり取りを求める行為”とされたように，対象や母親と距離のある状態で用いられる指差しは，関心を持った対象を母親に伝え，それについての共有的やり取りを持つために機能しているものと考えられる。そして，“手渡し”は直接的に母親に行為させる機能を持つため，原命令的行動として用いられることが多かったものと思われる。

また，原叙述，原命令的行動のどちらにおいても，lookingと発声は他の行動と比べカウント数が多かった。

本研究の分析において，情報探索行動は“伝達行為は行なわずに母親を見ること”であった。本研究の観察場面において，子ども達は母親の様子をただ伺うのみということは少なく，同時に何らかの働きかけを行なっていることが多かったものと考えられる。原叙述的行動，原命令的行動の内容について見ても，lookingは多く示されており，他の伝達行動とともにlookingを行なっていたことが分かる。Desrochers, Morissette, Ricard（1995）は，子どもの指差し行動を12ヶ月齢，15ヶ月齢，18ヶ月齢と縦断観察し，母親を意識して振り返りつつ指差しで伝えるという行為が，月齢が上がるごとに増えることを報告した。Desrochersらは表象発達との関連から，18ヶ月齢児は，母親が対象に向かって何らかの主観的・心理的な体験を持つであろうことを理解していると考察している。1歳半の子ども達は，母親が自分の伝えた対象について叙述的，情緒的な反応を返してくれることを期待してやり取りを行なっているのだろう。

また原叙述，原命令的行動において用いられた発声についても，他の行動と比べカウント数が多い。ここでの発声は，発声のみで行なわれたのではなく，必ず何らかの非言語的な伝達行動や母親の注視を伴っていた。この所見は，本研究の対象児よりも若干幼い子どもを観察したButterworth & Franco（1990）の報告と一致する。まだ言葉を発する前の子どもであっても，非言語的な伝達行動と発声を一緒に行なうことで関心の対象を特定し，伝達的な意図を持って他者へ働きかけているものと考えられる（Butterworth & Harris, 1994）。

母親の注視方向，関わり方と子どもの原叙述，原命令，情報探索行動の関連

まず，子どもの原叙述，原命令，情報探索行動と母親の注視方向および関わり方（応答・始発）の関連について考察を行なう。

子どもの原叙述的行動と母親の注視方向や関わり方の間には多くの関連が示された。“子どもの顔の注視”“子どもの行動の注視”“応答・随伴的関わり”との間に正の相関，“その他の場所の注視”“始発的関わり”との間に負の相関が認められた。“応答・随伴的関わり”との相関より，子どもが共有的コミュニケーションをより人へ発する傾向に，母親が子どもの注意や行動に合わせて働きかけを行なうことが関連していることが示唆された。また，“子どもの顔の注視”“子どもの行動の注視”との相関からは，母親が子どもの様子に注意を向けていること，そして子どもの表出をよく伺うことが，子どもの共有的コミュニケーションに関連していることが示された。

これら結果は先行研究（Tomaselloら1987,; Tomasello, 1994），において示されてきた所見に通じるものと考えられる。すなわち，1歳半児の原叙述的やり取りにおいても，母親が子どもの様子をよく見て注意の対象を共有すること，そして子どもが注意を向け関心を持っている内容に沿って働きかけを行なうことが，その発達を促がしている可能性がある。日常の母子相互作用において，母親が自分の行動に対して応答的に反応を返してくれたり，何らかの興味深い情報を与えてくれる経験を重ねる中で，自らの関心を母親へ伝え，やり取りを行なおうとする傾向が育てられるのではないかと考えられる。そして，自発的に共有的やり取りを行なおうとすることで，言語へとつながっていくものと思われる。

一方，原叙述的行動と“その他の場所・モノの注視”“始発的関わり”との間には負の相関が示されている。母親の注意が子どもから逸れることや，子どもの注意や関心の対象を転換させるような働きかけが多いと，子どもが自発的に共有的コミュニケーションをより人へ向けようとすることが少ないという関係にあることを示唆するものである。矢藤（2000）は，20ヶ月齢児との母子相互交渉において母親が行なう“転換”は子どもによって拒否又は無視されやすく，また注意の共有時間が短いことを述べていた。本研究の結果と並べて考えると，母親の注意が子どもの注意や関心の対象とは異なるところにあることや，母親が子どもの注意や関心の対象を転換させる働きかけが多いと，やり取りそのものが成立しにくくなるため，共有的やり取りの体験が少なくなるのだろう。そして，先取り的に働きかけられることが過ぎると，子どもが自分から共有的コミュニケーションを発しようとする傾向は抑えられるのかもしれない。

原命令的行動と母親の注視方向や応答・随伴的関わり，始発的関わりの間には相関が示されなかった。本研究で用いた観察場面の設定や対象児の年齢の要因も考えられるが，本研究における母親側の要因と原命令的行動の間には関連性が認められないということであろう。原命令的行動にどのような母親の要因が関連しているのかは，今後明らかにしていく課題となる。

情報探索行動との間では，母親の“子どもと同じオモチャ・モノの注視”“応答・随伴的関わり”に相関の傾向が認められたのみであった。この結果から，子どもが母親を振り返って様子を伺う傾向に，母親が子どもと同じ対象に注意を向けていることや子どもに応答的・随伴的に関わることが関連している可能性が考えられる。普段の相互交渉において，母親が自分と同じモノを見て，自分の関心に沿った働きかけをされる経験を持つことで，子どもは自分から母親の様子を見て反応を確認する傾向を持つようになるのかもしれない。

母親の注視方向，関わり方と子どもの原叙述的・原命令的行動における下位行動の関連

母親の注視方向，関わり方と，子どもの原叙述・原命令的行動において用いられた指差し，呈示，手渡し，発声，lookingについても相関を検討した。その結果，原叙述的行動において用いられた下位行動との間では，幾つかの有意な相関が認められた。

まず，子どもの原叙述的“発声”との間では，母親の“応答・随伴的関わり”“子どもの顔の注視”と有意な相関，“子どもと同じオモチャ・モノの注視”と正の相関の有意傾向，“その他の場所・モノの注視”と負の相関の有意傾向が示されていた。この結果は，子どもの原叙述的な発声に，母親が相互交渉において子どもの表出に注目することや，子どもの注意の対象を共有し，それらに沿った働きかけを提供することが，影響を与えていることを示唆するものである。

本研究の情報探索行動と母親の関わりの間では，有意な関連が見出せなかったものの，原叙述的なlookingとの間では，母親の“子どもと同じオモチャ・モノの注視”“応答・随伴的関わり”との間に比較的高い相関が認められ，“その他の場所・モノの注視”との間では負の相関傾向が示された。原叙述的なlookingは，指差しや呈示や発声といった伝達行動を伴っていたものである。子ども達は，母親の反応を確認しながら，コミュニケーションを発していた。Tomasello（1994，1995）の言う“他者を通した学習”や情緒的な共有性という観点で考えると，単に母親を見るのみでなく，自ら対象に関するシグナルを発しつつ母親を見ることの方が重要であろう。それによって，より効率的な学習が可能になり，また相手の反応を見つつコミュニケーションを行うことによって会話的なやり取りができるようになるものと考えられる。そして，そのような子どものlookingに，母親が子どもと注意を一致させ，応答的・随伴的に関わることが関連していることは，子どもの発達において母親が重要な役割を担っていることを示唆するものと思われる。

原叙述的な指差しや呈示と母親の注視方向や関わり方の間には有意な相関が認められなかった。本研究では原叙述的行動においても原命令的行動においても，下位行動の中で指差しや呈示よりも発声やlookingの方が頻度が高かった。指差し行動の発達を縦断観察した大浜，辰野，斉藤，武井，荻野（1981）では，18・19ヶ月齢をピークに指差し行動の生起率が減少していくことが示されている。本研究で対象とした1歳半という年齢において，指差しや呈示といった非言語的な伝達行動は各児に安定して示されるようになるため，これらの行動の個人差に母親の関わり方との関連が見出されなかったのかもしれない。そしてむしろ，まだ言葉にならなくとも発声やlookingを行なう傾向と母親の関わりとの関連性が，1

歳半児では顕著に現れるのではないかと考えられる。

今後の課題

本研究では，母親の注視方向，応答・随伴的関わり，始発的関わりと子どもの原叙述，原命令，情報探索行動の間の関連を検討し，子どものコミュニケーションに母親の関わり方のどのような特性が影響を与えているのかという観点から考察を進めた。

本研究が母子相互作用を扱う研究である以上，母子のコミュニケーションの在り方がお互いに影響しあっていることを，もちろん想定しなければならない。しかし，母親が子どものコミュニケーション発達の“足場”（Bruner, 1975）として働いているという観点から，母親から子どもへという影響の方向性を仮定して考えることは重要と思われる。すなわち，子どもが成長していく物理的・対人的環境の中で，どのように子どものある行動が発生し，環境中の何に支えられながら発達していくのかを明らかにすることで，発達システムが明らかになり，また発達やコミュニケーションの問題に対する臨床的介入に役立てていくことができるものと考えられる。

ただし，影響の方向性や子どもの発達段階によって足場となる母親の関わり方が異なる可能性を考えると，今後，縦断観察を行いより詳細な関係性の検討を行なうことが必要であろう。また，本研究では母親の関わり方を応答と始発の二つに分類したが，それぞれの関わりの中で母親達がどのような性質の働きかけを行なっているのか，より具体的な分類を行い，子どものコミュニケーションとの関連を検討していきたい。

引用文献

Acredolo, L. & Goodwyn, S. 1988 Symbolic gesturing in normal infants. *Child Development*, **59**, 450-466.

Adamson, L. B. 1995 *Communication development during infancy*. Westview Press. 大藪泰・田中みどり（訳）1999 乳児のコミュニケーション発達：言葉が獲得されるまで 川島書店

Bakeman, R. & Adamson, L. B. 1984 Coordinating Attention to People and objects in Mother-Infant and Peer-infant interaction. *Child Development*, **55**, 1278-1289.

Baldwin, D. A & Moses, L. J. 1996 The ontogeny of social information gathering. *Child Development*, 67, 1915-1939.

Bates, E., Camaioni, L. & Volterra, V. 1975 The acquisition of performances prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly*, **21**, 205-226.

Bruner, J. S. 1975 The ontogenesis of speech acts. *Jornal of child Language*, **2**, 1-19

Butterworth, G. & Harris, M. 1994 *Principles of developmental psychology*. Lawrence Erlbaum Associates Ltd. 村井潤一（監訳）1997 発達心理学の基礎を学ぶ－人間発達の生物学的・文化的基盤－，ミネルヴァ書房

Desrochers, S., Ricard, M., Decarie, T. G. & Allard, L. 1994 Developmental synchrony between Social referencing and piagetian sensorimotor causality. *Infant Behavior and Development*, **17**, 303-309.

Findji, F. 1998 Infant attention scaffolding at home. *European Journal of Psychology of Education.*, XIII(3), 323-333.

Folven, R. J., Bonvillian, J. D., & Orlansky, M. D. 1985 Communicative gestures and early sign language acquisition. *First Language*, **5**, 129-144.

Hoff-Ginsburg, E. 1987 Topic relations in mother-child conversation. *First Language*, **7**, 145-158.

Klinnert, M., Campos, J., Sorce, J., Emde, R., & Svejda, M. 1983 Emotions as behavior regulators: Social referencing in infancy. In (Eds) Plutchik, R. & Kellerman, H. *Emotions in early development (Vol 2): The emotions*. New York: Academic Press, pp57-86.

Lawson, K. R., Parinello, R., & Ruff, H. A. 1992 Maternal behavior and infant attention. *Infant Behavior and Developmant*, **15**, 209-229.

三宅和夫（監修）1989 KIDS：乳幼児発達スケール （財）発達科学教育センター

Moore, C. & Corcum, V. 1994 Social understanding at the end of the first year of life. *Developmental Review*, **14**, 349-372.

Moore, C. & Dunham, P. J. (Ed.) 1995 *Joint attention: Its origins and role in development*. Lawrence Erbaum Associates, Inc. 大神英裕（監訳）1999 ジョイント・アテンション：心の起源とその発達を探る ナカニシヤ出版

大浜幾久子，辰野俊子，斉藤こずゑ，武井澄江，荻野美佐子 1981 母子相互作用における指差し行動の発達－時間標本資料の分析－．教育心理学研究，**29**，272-278.

Olson, S. L., Bates, J. E. & Bayles, K. 1984 Mother-infant interaction and the development of individual difference in children's cognitive competence. *Developmental Psychology*, **20**, 166-179.

Saxon, T. F. 1997 A longitudinal study of early mother-infant interaction and later language competence. *First Language*, **17**, 271-281.

Tomasello, M. & Farrar, M. J. 1986 Joint attention and early language. *Child Development*, **57**, 1454-1463.

Tomasello, M. 1992 The social bases of language acquisition. *Social Developament*, **1**, 68-87.

Tomasello, M 1994 On the interpersonal origins of self-concept. In (Eds) Neisser, U. *Ecological and interpersonal*

sources of self-knowledge. Cambridge Univ. Press. Pp174-184.

Tomasello, M. 1995 Understanding the self as social agent. In (Eds) Rochat, P. *The self in infancy: Theory and research.* Elsevier ScienceB. V. Pp449-460.

Wellman, H. M. 1993 Early understanding of mind : The normal case. In (Eds) S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg, & D. Cohen. *Understanding other minds :Perspective from autism.* Oxford Universitiy Press.

矢藤優子　2000　子どもとの注意を共有するための母親の注意喚起行動：おもちゃ遊び場面の分析から．　発達心理学研究，**11**(3)，153-162.